

# 明日からの授業づくりを考える

## 知る（分析力）

授業づくりを考える上で、児童生徒の学力や学習の状況についての正確な実態把握は欠かせない。何事も計画の際には、徹底した現状把握の上で行うことが必要であるが、授業もまた意図的・計画的に行われるべきものであることから、この実態把握の重要性は言うまでもない。これまでも教員は、既にもっている専門的知識と豊かな経験、日々の細かな観察などから、児童生徒の実態把握に努めてきた。一方で、様々な調査や標準テスト等の実施で得た、客観的データも参考にしてきたところである。

本書、第一部第1章は、過去3年間の学力・学習状況調査の結果をまとめて記載し、奈良県の児童生徒の実態を浮き彫りにしようとしている。続く、第2章では更に課題を明らかにするため、教育目標分析の考え方を取り入れた学力上位県との設問ごとの比較や、統計解析手法を取り入れた分析を行っている。

このような課題分析は、これまでも各学校でも行われてきたが、学校組織の中でこれらの分析を担当する分掌を位置付け、学力向上の中心的役割を担うことが必要である。正確で緻密な実態把握の上に課題解決のための取組が計画されてこそ、効果を発揮するものとなり得るのである。

## 生かす（活用力）

次に、様々な実態が浮き彫りになり、明らかとなった課題にいかに取り組むかということが、教職員全体の共通理解となっているかどうかのポイントとなる。調査対象学年だけでなく、学校全体で調査結果を共有し、課題解決のための取組を進めることが重要である。学校全体で、指導内容や方法を検討し、共通理解を図って一致して取り組むことが大切であり、そうすることで指導が教員によって異なることなく、統一して行うことが大きな力となることは、聞き取り調査からも明らかである。

また、調査結果を生かしてどのように課題解決に取り組むかということと同時に、様々な調査が示唆する「今、求められる学力」についても研修を進めることが重要である。全国学力・学習状況調査は、学習指導要領に基づき、「求められる学力」が身に付いているかを問うている。調査結果は、学力の一部に過ぎないことは言うまでもないが、まずは、この調査結果も学力の一部であるという認識の下、真摯に課題を受け止め、「求められる学力」を身に付けさせるための方途を考えるべきである。その一歩として、学力調査問題の活用が挙げられる。調査問題を対象学年だけでなく、全教職員で解いてみる。あるいは、児童生徒の解答を自分たちで採点する。そのような取組を通して、「求められる学力」に教員自らが気付くことができる。

## 変える（授業改善力）

児童生徒の解答を教員自身が採点することで分かることは多い。正答だけでなく、誤答にも着目せざるを得ない。なぜ、このような誤答をするのかという誤答分析が進むと、どのように授業改善をすればよいか、ということが見えてくる。児童生徒のつまづきがどこにあるのかを見付け、課題克服の手立てを考えることが教員の務めである。そのためにも、教員は、常に授業を見直し、授業改善に努める必要がある。現状に甘んじることなく、試行錯誤を繰り返して、常に授業改善に努めることこそ、児童生徒に確かな学力を育成するための本道であり、近道でもある。変えることを恐れることなく変わり続けること、言い換えれば「学び続けること」が、児童生徒の前に立つ教員には不可欠な姿勢である。